

## ギリシアのつた

矢 島 祐 利

アテネ行のバスの中より仰ぎ見るアクロポリスは神々しきかな  
あてもなく歩み来りし街裏に風の塔ありしばし挑むる

ゲオルギオスの丘に登れば眼の下にアテネの街は静もりてあり

道のべにサボテンの実のうれたればイスラエル思ふ彼の地にもありき

本屋あれば入りても見るに札下げてひるねの時間いと良きかな

茶店にてトルコ・コーヒー呑みをればフイリッピンかと人の間ふなり

リュケイオンといふ地区ありむかしアリストテレス学苑の地か

写真にて見しことあれど今ここにライオンの門をわがくぐるなり ミュケネ

シェリーマンが掘り当てにける数々の遺蹟は人をここに立たしむ

むかしわれアガメムノンといふ書物読みしことありここにて思ひ出す

牧場あり羊の通る石柵は御影石なるにすべなりき アルゴス

かの細き羊毛が触るる石の柱磨きあげたる時の長さよ

沖合に砦の「」とき島ありてナウブリオンの海は静けし

イギリスとアイルランドの若ものと道連れになり樂しかりけり

エビダウルス野外劇場の舞台にて青年うたひ吾は座席に試し聽く

音効果すばらしかりき古への匠のわざを思ひみるべし

『ももんが』第三五巻第一一号（一九九一年一月号）

## エジプトのつた

矢 島 祐 利

よる更けてカイロに着きぬ頼みおきしホテルに入りてすぐに眠らむ  
街に出てフランスの書店見つけたり何よりさきに案内書求む  
国立の博物館に入りてみる五千年の歴史目の前にひろがる  
この地には古き文明のありしこと語るがごとしニルの流れは  
アラブにてカーヒラと呼びしこの街はファーティマ朝の都なりけり  
ラクダにてギザのピラミッド見に行けばラクダのうまかたしきりにねだる  
アラブ人案内に顧みバザールを見る香水一瓶買はされにけり  
さまざまの物売りて居りなかんづく金物細工もつとも多し  
脂こき料理を食ひて腹くだり半日ばかり休みて居たり

ホテルより夕粧ひしてゆくをみな如何なる所へ行くにやあらむ  
夜の街はおそろしければ出で行かず宿にこもりて案内記よむ  
サツカラの段々ピラミッド見に来り暮れ近づけば帰りをいそぐ  
かたはらに石室あれば入りて見る壁画の色はいまだ残れり  
横たはるラムセス二世の石像は長さハメートル寝釈迦に似たり  
初めより寝姿にてはあらざりし時の流れに倒されにけむ  
このあたり草木少しありタづきてよくは見えねどオアシスの村か

『ももんが』第三五巻第一二号（一九九一年一一月号）

## 蘭 の 花 矢 島 祐 利

3

行商の蘭を一鉢買ひにけり少し豊かになりし心地す  
この蘭はシンピティウムの一種にてスケッチブックに描きしことあ  
いくたりの思ひ出の文を書きにけん我より若き人もふくめて  
年老いて遠行くことはかなはねば昔の旅も思ひみるべし  
かつて我チンドルの書を訳したればアルプスの氷河見たしと思ひき  
ゆくりなくメール・ドウ・グラスに立ち見ればチンドルの挿絵と少しも変らず  
年月は長く経れど天然のいとなみは余り变らぬらしき  
わが庭のはぜ五六本色づきて小さき秋の主役となりぬ  
はぜもみぢ久しくなりぬこの日ごろ木括らし吹きて散り初めにけり  
オートバイからぶかしするヤングらをたしなめし人刺されしといふ  
傷きしあるじのそばに居りし犬敵にかみつく力なかりしか  
犬飼はば愛玩よりも護身用つよく猛きを選ぶべきもの  
争いをおしとどめんとせし人を斬りて逃げしも捕はれし一人  
車待つ列に割込む若ものを制止せし人もなぐられにけり  
歌よみて何の役にもたたねどもわが憤りやる方もなく  
仮名遣い旧き新しき言うなけれローマ字にてもかまわぬものを

『ももんが』第三六巻第一号（一九九一年一月）

十月号の「土屋文明先生の追憶」の冒頭で、大正十四年九月田端大龍寺で子規忌アララギ歌合が開かれ、初めて歌合というものに出席したと書いた。ところがこれは記憶ちがいで実は大正十三年であることが分った。その切っかけは少し長くなるが次のようである。去九月ある書店の古書目録に赤彦先生の短冊幅というのが写真入りで出ていた。その歌にちょっと読めない字があつた。歌柄から『氷魚』だろうと思つて出してみると、一四

六ページの三首目に「松の木にわが凭りしかばたはやすく剥げて落ちたり古き樹の皮」とある、これだ。この凭るという字が崩してあるので読めなかつたのである。それだけではない。短冊では下の句が「はげて落ちたる寂しき樹皮を」となつてゐる。樹皮に仮名がふつてある。短冊に仮名をつけたのは珍しいが作者の意図するように読んでもらいたいからである。もちろん『氷魚』の方が決定版であろう。歌集に仮める前の雑誌に発表されたのはどうなつていたか、そこまで詮索するこはないが、大正六年「梅と松」という十七首の第五番一目の歌である。

これが切っかけとなつて赤彦先生の歌を読んでみたくなり、歌集を全部持ち出して数日眺めていた。また私が初めて読んだ歌についての本である『歌道小見』を何度も目かで通読してしまつた。それから赤彦先生に初めてお目にかかつたのは何年であつたか、そんなことをまで考えた。そこで古い「アララギ」を取

出してみると、大正十二年六月号に岡麓選で一首出ていた。これが最初で八月号に島木赤彦選で一首、これはまぐれ当たりで新入会員の歌稿はどの選者の所へ廻される分からぬ。それから十月号に藤沢古実選で一首、十一月号に中村憲吾選で一首、十一月号に赤彦選で一首出でている。

これで分つた。大正十二年の初秋つまり九月もしくは十月面会日に麹町下六番町のアラギ発行所で初めて赤彦先生にお目にかかり、歌の添削を受けたのである。十月でも十二月号に間に合う可能性は十分ある。このつづきはもう少しあとへ譲つて、今言つた十一月号に田端大龍寺の歌会の記事があつて、それは九月二十七日とある。日曜日であつたと思う。私の「赤あきつ尾花がうれにとまりつつ吹く風寒く夕暮れにけり」という駄作が記録されている、これが土屋先生から道具立てが多過ぎると評されたのである。歌会へ行く道で間に合せいでつちあげたもので、九月二十七日というから夕方などはうすら寒くなる頃であつたのも納得がいく。

田端大龍寺の子規忌アラギ歌会が大正十三年であつても十四年であつても、たいしたことではないが、私の歴史にとつてはかなり大事なことである。今度思いがけなく正確なことが分つたのは幸いである。そこでさきほどの話の続きを書くことにしよう。それはアラギとの出会いのことである。

前に書いたことがあるが、私の短歌との出会いは大正十一年に石原先生の歌集を読んだことである。その前年すなわち大正十年に石原純先生の『相対性原理』が出版になり、そ

れにかじりついていた時、新聞広告に石原先生の歌集のことが出たので早速買つたのである。もつとも先生がアララギ流の歌人であることは聞いていた。

この歌集にはヨーロッパへ留学のため汽車で一週間もかかつてシベリアを通つたこと、またチヨーリッヒにAINシユタインを訪ねたときの感動などが詠まれていて私は少なからぬ興味を覚えた。それで眞似をして「落葉松のあまたつづける高原に秋風吹くを愛しみにけり」というのを作つた。これが私の最初の短歌作品である。結句の「かなしみにけり」はトラウリッヒでなく、心を動かされたくらいの意味である。軽井沢あたりのモチーフで作ったものである。

こんなつまらぬ歌を覚えているのには次のことが関係しているかも知れない。私は大正十二年に大学へ入り、紹介してくれる人があって南甲寮というのへ入つた。貧書生であつたから少しでも安い方がよからうというわけである。これは間島乙彦という方が大学在学中だつたが卒業して間もなくであつたが、病氣でなくしたご子息の供養のため然るべき紹介者のある東大生をいれるというもので、十二室くらいしかない比較的小規模のもので、神田の南甲賀町にあつたから南甲寮といった。この寮で数学科の石田己代治君と知合つた。石田君は小豆島の人で六高出身であつた。文系では仏法の山添利作君がいた。山添君は一高の文化丙類で中平君と同期のはずである。彼は農林次官まで勤めたが惜しくも先年亡くなつた。ところで春に南甲寮へ入り、やがて夏を迎えた。私はさきほどの落葉松の歌を白扇に書いて使つていた。石田君がそれを見せると「どうから渡すと「からまつがあまたつづけるコウゲンに」と読んだから私は「たかは

ら」とよんぐれと言つた。すると石田君はコウゲンの方がいいじゃないかと應じた。こんな些細なことが絡み合つて駄作を覚えているのである。記憶の構造を研究するのに役立つ事例の一つであるかも知れない。

その南甲寮の生活は半年は続かなかつた。

関東大震災で寮は焼けてしまつたからである。この年私は夏休が終らないうちに上京してい大地震を南甲寮で体験したのである。そうして逃げたのであるが、それは余りにも脇道になるからやめて置こう。大学も被害を受け仲々開講にならなかつた。上野の図書館へ通つて「アララギ」のバックナンバーに目を通したのはこの時期ではなかつたかと思う。「アララギ」は本郷の本屋で売つていたが、その歴史を知りたかつたのである。図書館へ毎日行けるわけではないから、上野にあるだけのバックナンバーにざつと目を通すのに翌年春までかかつたと思う。

こんなふうにしてアララギへ入会したのは大正十三年の三月か遅くも四月であつたはずである。入会申込と同時に投稿したとして、六月号に初めて一首載つたのであるから、そういう勘定になる。そうして島木赤彦先生にお願いしますという手紙を差し出したのは九月の初めであつただろう。すると面会日に麹町下六番町の発行所へお出なさいという返事を頂戴した。それで十月の面会日に初封面をなし歌を見ていただいたのである。それで十二月号に俄然大量の歌が載ることになつたのである。

大正十四年には面会日がある限り欠かさず出席した。そうして秋になると明年卒業予定

私の卒業後の就職について気を配つて下さるほどであった。このことについては「五味さんの思い出」(アララキ、昭和五十七年十一月五味保義追悼特輯号)に書いたことがあるから此處に繰返さないが、このことで五味さんが当時見ず知らずの私のために仲介の労を取られたことだけは記して置かなければならぬ。というのは赤彦先生は五味さんが勤務していた学校へ私を振り向けようとして、五味さんからその上司へ働きかけるよう話を進められたのである。この話は内定にまで行つたのであるが、私は大学の他学部だが講師をやることになつてしまつた。その五味さんは私が初めてお会いしたのは大正十五年三月末、諫訪高木での赤彦先生のお葬式のときであつた。こんなわけで五味さんとはその後ずっと親しくしていただいた。これもアララギへ入会したおかげである。

このようにして赤彦先生に親しく接したのは一年と少々に過ぎない。しかしその一年は私の二十一歳から二十二歳にかけてで、感受性の強い時期であつたから十年にも匹敵する。先生のおもかげは六十年以上経つた今も私の脳裡にあざやかによみがえつて来る。しかし先生を偲ぶにはその作品を見るに如くはない。私が先生に接することのできた時期の歌では「湖の氷は解けてなほ寒し三日月の影波にうつらふ」がすぐに思い出される。先生に言つたら叱られるだろうが、これは先生の用語で言つと寂寥相に到達した作品であろう。しかしこういう境地に達するには何十年もかかることであり、凡庸の者には一生かかつても到達することはできない。全く歯が立たないものである。じついう歌を通された先生にも甘美な青春時代があつた、否そういう道を通じてこそ「みづうみ」のような歌に至り得る

のかも知れない。

先生の第一歌集『馬鈴薯の花』（大正11年七月）は久保田柿人・中村憲吾合著となつていて、まだ島木赤彦ではない。先生の分が前にあつて、明治四十一年（十首）、四十二年（一一一首）、四十四年（四十九首）、四十五年、大正元年（百五十首）、同一年（四十首）、『詠詩』（五七十一首）が収められてゐる。明治四十一年の十首は上高地温泉四首と客居六首から成る。客居六首の最初は「げんげ田に寝」の六首、行く雲のとぼちの人を思ひたのしぬ」（4ページ）、次は「妻十人や

遠くおき来てことある心やわらつて花ふみあそぶ」（4）となつてゐる。年譜（島木赤彦全集、第八巻）を見ると、作者は明治四十一年一月、東筑摩郡廣丘小学校の校長になり、いわゆる単身赴任した。当時三十四歳、公務の傍ら歌の方でさまでまな活動をしていたことが年譜から分かるが、何とこつてもわびしいことだつたと思ひ。

翌明治四十二年の作品に移ると、最初に「草枯の野のくにみつる毒すきの光の下に動くものなし（廣丘村）」（9）があつて、あとすべてこれにつづくものである。これにつづく一連の中ほゞに「ひとつよき口せしの照らふ虫（に）の類を草の深みにあひ見つるかな」（12）がある。これは廣丘で何かあつたことを想像させる。廣丘村（当時）とこうのは認訪から塩尻峠を越えて松本平に入った所で、桔梗が原の一角にある。私は数年前車でこの道を通りて松本の方へ行く途中そのあたりを望見したことがある。

『ももんが』 第二二六巻第四号

アリバギとの出会い (一)

矢島祐利

赤彦先生の追悼会が芝の増上寺でおこなわれたとき、多くの方々の追憶談があつて、その中に広丘時代とか桔梗が原などいう言葉もあつたような気がするが、当時は赤彦先生のお若いときの話に特別の興味を持つていなかつたので聞きながしたのであるが、近年神

戸利郎著『辛夷の花柿の村人から島木赤彦へ』(昭和五十八年八月、諏訪文化書局刊)が出て広丘時代が明らかになった。

これによると広丘小学校に中原静子(歌では閑古)という女教師がいて相問歌が生れたといがあるのである。これだけ知れば『馬鈴薯の花』また『切火』の歌がよく分るのであるが、川井静子遺書・川井至吾編『去りがてし森』(昭和五十八年十一月、文化書局)も刊行されているから、お名前を出しても差支えないと思う。その詳細は私の関心の外にある。仮りに『赤彦の恋歌』(岩波新書に『芭蕉の恋句』がある)などという題目が考えられるとしても、そういう観点からものを言うのではない。あくまでも作品の鑑賞が眼目である。そういう意味で『馬鈴薯の花』をもう少し見てみよう。

さきに引用した「丹の類」のすぐあとに

「草の日のいきれの中にわぎも」の文はかくろふわが腕のへに「夏草のこよよ深き」につましき心かなしくきはまりにけり」が為

る。それはま」とにつつましき恋であつただ  
う。しかし「校長先生は夕方になると森の  
方から帰つて来なさる」という噂が立つよう  
になつては眞偽がわるい。

明治四十四年の作品の第一首に「いをさか  
の心動きに冬がれの林の村を去らんと思ひし  
(広丘村)」(19) と云ふことになる。かくし  
てこの年三月広丘小学校長を辞して諭訪郡玉  
川小学校長に転任となつた。これにつづく歌  
はこの転機のことを知つておいた方がずっと  
理解し易い。「広丘村」五首のあとに「林の  
村を去る六首」がある。そのうち初めの二首  
をあげておひづ。斯くの「ことかなしき胸を

森ふかね青蘿の上に一人庭つゝへ」「うの森  
の園の上にやねてのぞむせられへいに森の  
ねぐら」(21)「一升を深庭にしれ故ひか  
我を贋せたぬかねつね森せや」

の名で刊行された。雑誌ではもう少し前からこの名になつていていたと思うが、今はそのような事に興味がない。切火というのはきびしい言葉であるが、思い出を振り切つて新しい発のため門出を静める心持を現わしたのであろう。この歌集の初めに「八丈島」（大正三年）が置かれたのは故なしとしない。「山の国」（大正二年）はその次に並べてある。八丈島の歌から少し引用すると次のよう

のがゐる。「みんな同じ漁業しないで海づく  
立黒漁やせトヨ」ハ歌多」(2)「立のわか  
歌つみつる深檜」ハ歌多」(3)「立のわか  
立黒漁やせトヨ」ハ歌多」

(3)。ひとりで流人の島ハ丈島へ旅したのも過去の想い出を払拭するためであつただろう。しかしそれは容易に消え去るものではない。

「山の国」の一連では初めに「諏訪湖」数首があつて、その次の「ハケ岳」七首の最後に「おきのねせなのあと思ひ入り立つて睡を冷たく懸おじぬかむ」(54) がおる。されにひづく「御牧が原」の第一首に「草深野

丹にじゆわぬ批のせのかだにわやいととする身はあせねなつ」(55)。御牧が原は佐久盆地にあるが、この歌では桔梗が原と「重印」になつてゐる。

わの歌の元田はやめるが、晩年に前に書いた「湖の氷は解けてなほ寒し」の影波に

「いつわら」(『太虛集』(217)) のよのな枯淡

な歌を作られた赤彦先生にも甘美な若々しい作品のあつたことが親しみを感じやむのである。

一方、瀬藤茂吉先生は、私が入念したこの海外留学中であつたが、大正十三年の暮には帰国の途に就かれた。船がシンガポールあたりまで来たのであつたのつか、瀬藤茂吉氏間もなく帰国といつて記事が朝日新聞に載り、短歌一首が添えてあつた。その一つは「瞿曇も辛き飯食ひにけむ」とこののであつた。上の句を忘れてしまつたので『遍歴』を見てゆくと、終りに近い所に「十一月十七日、口ノボ上陸」といつて詞書があつて、その第四首田に「汗にあえつてわれは思くりいとけなき瞿曇も辛き飯食ひにけむ」(337)があつた。印度で辛いカレーを召上つたのであらへ。そのお新規やまも幼少のじゆいんな辛い飯をお食べになつたのだと歌われたのだが、じゆいよぬじての句が先にできたのかも知れぬ。

わの「つは何でも虹が立つ歌であつた。そ

「Jで先刻のつづきを見て行くと「こつしかも  
潜のかなたに遙そきしセイロへに虹の立てる  
あはれや」(343)があつた。Jねだ。Jの  
がJの歌集のやひ少し先(365)は「十一」円II  
十一円、午後一時青山脳病院全焼の無線電信  
を歌く」とこの詞書があつて歌四首がある。  
Jの火事のJとは私なども当時新聞で承知し  
たが、何とも痛ましこじとあつた。そつし  
て大正十四年一円五円神戸にお着きになつた。  
それから私はいつ斎藤先生のお顔を見たの  
かと考へてみた。そつすると赤彦先生の面会  
日に鞠町の発行所の一階で数名の仲間と一緒に  
に、誰かが歌の添削を受けていたとき、外で  
久保田君と呼ぶ声がした。すると赤彦先生は  
「せつ、斎藤だ」と言つて嬉しそうなお顔を  
された。そつして階下へ下りて行かれた。私  
はもつ歌を見ていだいた後であつたから早  
速退出した。そのときねらつと斎藤先生のお  
顔を見たと思ふ。あれは何時であつたか、最  
も早くて大正十四年一円である。念のためそ  
の年の「アララギ」一円歌を見ると編輯所便  
に「小生一円は面会日を欠き候。当日御歌持  
參を例とせらるる諸君は一円五円迄に着くや  
う信濃国諏訪町字高木小生宛送稿下され度候。  
一円より面会日を毎円五円と改むべく御承知  
下され度候」とある。そつするとあれは一月  
五日かそれより後といつことになる。何れに  
せよ大正十四年のそんなに遅くない時期であ  
る。

大正十五年二円、赤彦先生がお亡くなりにな  
つたあと、先生の面会日代りに斎藤先生  
と土屋先生の面会日が設けられた。両先  
生が並んで坐つておられ、吾々は順番を待つ  
てお手すきになつた方の先生の前へ進み出て  
歌をみて貰つのである。私もこれに出席した  
ので、斎藤茂吉選の所へ歌が載つたことがあ

る。このときはお目にかかつたと言える状況であった。

しかし続けて斎藤先生に歌を見ていただこうという気にはなれなかつた。もとより斎藤先生の歌には敬意を払っていたが、近づき難いという気がしたのである。例えば「赤茄子の腐れてゐたるところより幾程もなき歩みなりけり」『赤光』(103)などになると天賦の才能がなければ作れない歌である。例えばこれを西洋語に訳したと仮定して、どんなに精确に訳してもさっぱり面白くないものになるだらう。ところがこれを原文のまま口吟んでみると何だかおもしろい。そこに言い難いポエジーがあるからだ。

そんなわけで以後私は土屋先生にお願いしたので、その経緯は「土屋文明先生の追憶」に書いた通りである。それでは土屋先生なら近づき易いのかと問われるなら、それは比較的の話である。土屋先生の思い出はまだいくらもあるので少し追加しておきたい。

先生の初めての歌集『ふゆくさ』の批評号

で芥川龍之介は、土屋文明の中には和御魂と

荒御魂あらみたまが同居していると書いている。うまい

事を言つたものと思う。「ふゆくさ」の中には実にやさしい歌がいっぱいある。しかし土屋先生の面会日に初心者が歌稿を差出したら「こんなのが歌か、これが歌なら君に筆記できないくらい立てつづけに詠んでみせるぞ」と言われたことがある。そのすさまじさには初心者氏はすこすこ退散するしかなかつた。それより余程のちのことだが、選者をやつていると脅迫状が来ることがあるよ、俺の歌を一首も採らないなら行つて殺してやる、というのがあつたね、と話されたことがある。

会員の投稿歌は一首は採つてもらえると思つていたら、土屋先生の手にかかると一首も載せてもらえない人がいたと見える。そういうきびしい先生であつた。こういう事は神経が余りほそい人にはできない。

先生は気が短かくて喧嘩早いことは「自分で認めておられ、そういうことを詠んだお歌がある。ある時どういう場合であつたか、土屋先生が色をなして拳を振り上げようとするのを傍にいた藤沢古実さんが引きとめるのを私は目撃したことがある。

先生がこまやかな心遣いをなさる人であるのを一つ思い出した。私は大学を出るとすぐ講師にしてもらつたが、薄給で暮らしあは楽でなかつた。そこでアルバイトの本を出すことを思いついた。昭和五年のこととてその頃はまだアルバイトという日本化されたドイツ語は使われていなかつたが、今ではそう言つた方が話が早い。出版は寺田寅彦先生のお宅で同席してから懇意になつた今は亡き小林勇君の鉄塔書院（この屋号は幸田露伴命名の由）からで、これも寺田先生のお口添えによつたのである。小林君はそのころ岩波を離れて自分の店を出して出版を始めたばかりで、藤沢さんの『赤彦遺言』もここから出版になつた。その直後のことである。このとき土屋先生は「アララギ」へ広告を出すから紙型を発行所へ届けるよう小林君へ言いたまえとおつしゃつた。そのころ、いやもつと前から「アララギ」のうしろの方に赤い紙の広告のページがついていた。そこへ、むろん無料で広告していただいたのである。

それでまた思い出したことがある。土屋先生もお若いときアルバイトの訳書を出されたことがある。それは暴露というようなことではなく、それが大変おもしろいものだから此処

へ書くのである。もつとも今回初めてでなく  
数年前「科学史研究」へ載せた小論の註の中  
でこの本のことを記したことがある。それは  
土屋文明訳述『波斯神話』（大正六年＝一九  
一七）である。これはペルシアの大詩人フェ  
ルドゥスイーの『シャーナーム』から採つた  
もので先生はことわってないがアトキンソンソン  
の英訳に依つていることは間違いない。その  
原典からの日本語訳は「く最近ようやく出た

ので、黒柳恒男訳『シャーナーム王書—ペルシア英雄叙事

詩』（昭和四十四年、平凡社、東洋文庫150）

である。

話が枝葉末節に来てしまつたが、五味さん  
はとうに亡く、土屋先生を失つてしまつたア  
ララギはまことに寂しい。

（一九九一・一〇・一九）

『ももんが』第三六巻第五号

（一九九一年五月）

## アガメムノンのうた

矢 島 祐 利

「ギリシアのうた」（九一年十一月号）の中に「むかしわれアガメムノンと いう書物読みしことありここにて思ひ出す」というのがある。ミコケー ネの遺蹟に立つて案内人の説明をき いているとき、アルゴスだのアガメ ムノンだの、そういう言葉が出て来 て、それで思い出したのである。あ れは高等学校三年の時であつた。本 屋で田にとまつたのを何気なく買つ て来たもので、題がアガメムノンと いうのと、ギリシアの昔の話とい うことしか覚えていない。今考えてみ ると丁度チャールズ・ラムの『シェ ークスピア物語』のような、言うな らば『アガメムノン物語』というよ うな本であつたかと思う。そこで本 物の『アガメムノン』を読んでみた いと思った。岩波文庫のアイスキュー ロス『アガメムノン』（黒茂一訳）、 ロエブ古典文庫のテキストおよび英 訳、それにジャン・ポロックとピエ ル・ジユデ・ド・ラ・コムブの『ラ ガメムノン・デスキエール』（リル 大学出版部、一九八一）によつて大 意を探つてみた。ギリシア語はとて も読み通せないので固有名詞だけギ リシアつづりを確かめるという横着 な読み方で、油絵を白黒写眞で鑑賞 するようなものかも知れないが、次 のような要約の歌を作つてみた。

（一九九二・七・一五）

アルゴス王アガメムノンは千艘の軍船つらねトロイに向ひし  
王宮の屋根の上には見張立て勝利ののろし待ちて久しき

ある夜へいにのろしあがれば番兵は王妃のもとに走りて告げぬ  
王姐クリテメストウ喜びてトロイの都落ちぬと思つ

時ありて飛脚の兵士着きたれど余りうれしきさまにもあらず

九年ぶりにアルゴスの士を踏むという兵は王の御帰館間近しと云ひ  
国王はトロイの王女カサンドラをいくさのみやげに連れ帰りけり  
さはあれど田出たき勝利にてはあらざりし悲しきことぞいやまさりけれ  
海荒れて神に祈ればいけにえに姫を捧げよと占ひ師にひし  
おきわきは母性のこじりやみ難くアガメムノンを刺してしまひぬ

『ももんが』第三七巻第一号（一九九三年一月）

